

生涯。ピアノノは離さない

加古隆 パリでのデビューから50年、記念ツアー

加古隆が自らを「作曲家・ピアニスト」と称するのは、こんな理由がある。「東京芸大で作曲を学んでいた時は人前でピアノは弾かなかった。でも僕はパリに行ってピアノを取り戻した。もう生涯離さない。だから必ずピアニストと名乗る」

1973年にパリでフリージャズピアニストとしてデビューしてから50年になるのを祝し、15日からツアーが始まる。毎回の公演は「巴里の日」「ボエジー」「クアルテットの誕生」「映像の世紀」パリは燃えているか」という四つのパートで構成される。

「パリでのデビューから今に至るまでの、僕の音楽の変遷を一望できるものにしたかった」

パリの自由な気風に刺激され、フリージャズピアニストとして過ごした楽しい日々。次第に「常に新しいことをしなければ評価されないのではないかと」、前衛的な表現にとらわれた自分を解放してくれたのが、85年に作った「ボエジー」だった。

イングランド民謡「グリーンズリール」をモチーフにしたこの曲は、前衛的でも、グルーブがあるわけでもない。「でも、自分の好きなものを追求することで、十分に表現ができるようになった。この曲が、ジャンルにとらわれない今のスタイルを見つけたきっかけにもなった」

ジャズの演奏を機にグループ演奏

美しい音響かせ 優しい感性あふれれば

が好きになったという加古が「少しでも長く続けるために最小限の構成で」結成したが、「加古隆クアルテット」だ。そして、代名詞ともいえる「パリは燃えているか」をはじめとした映像音楽。

加古の音楽人生を語る上で欠かせない要素を存分に詰め込んだ、まさに集大成のような内容だ。

小学校の先生に才能を見いだされてピアノを習い始め、夢中になった。芸大では作曲に専念するためピアノから離れた時期もあったが、パリに行き、自分のやりたいように音楽をやっていたのだと気付けた。

「なにか運命的な導きも感じながら、気付いたら50年経っちゃった」

このツアーを終えた時、何が見えてくると思うか？ そう尋ねると、笑いながらこう答えた。「実は、音楽をやる上でののはっきりとしたビジョンや展望というのはないんです」

だが、ひとつだけ決めていることがある。それは「生涯現役で、美しく、きれいな音を響かせること」。

これは「芸術と社会はつながっている」という信条から来ている。「僕の音楽を聴いた人、とくに若い人たちがそれを『いいな』と感じて、優しい感性が育って、より良い社会になればいいなど。それに、長く続けているうちに覚えてくるものもあるんじゃないかと思えます」。

加古にとって50年は、通過点に過ぎないようだ。

(片長理佳)



キョードーメディアス提供

◇アニバーサリーコンサート「ソロ&クアルテット～ベスト・セレクション～」 今月15日から5月にかけて福岡、兵庫、北海道、大阪、愛知を巡る。最終日は5月28日のサントリーホール(東京)。詳細はホームページ(<https://takashikako.com/>)で。